

# 富岡製糸所から19世紀のパリ、リヨンまで。 川島忠之助が出会った人々について

講師：川島瑞枝様

1月の定例研究会は、川島瑞枝様をお招きしてご講演をいただきました。川島忠之助（嘉永6（1853）～昭和13（1938）年）は横須賀でフランス語を学び、明治6（1868）年に富岡製糸所でお雇い外国人ブリューナの通訳を務め、明治9（1876）年には蚕種紙売り込みの通訳として世界を一周、明治15（1882）年からは横浜正金銀行リヨン出張所へ派遣され銀行家となりました。また、日本で最初に翻訳されたフランス文学が、忠之助によるジュール・ベルヌの『八十日間世界一周』です。川島瑞枝様は忠之助の孫に当たり、『我が祖父川島忠之助の生涯』（2007年）を著され、『川島忠之助からの便り 明治十年代横浜正金銀行リヨン出張所にて』（2012年）を監修なさいました。原三溪とは富岡やリヨンや銀行というキーワードが重なる同時代人・川島忠之助について、川島様が新出資料を交えながらお話くださいました。



4年前に川島瑞枝さんの著書を読んでおり、自分と同じように先祖の足跡を調べて、しかも本にまとめられている彼女の講演は大変楽しみでした。

ご子孫が生で語られる、フランスに深い関わりをもち、銀行マンとして蚕糸にもかかわった川島忠之助の生涯は、本を読んで知るのはまた違った「生きた人間」として私の心に刻まれました。激動の時代、幕臣の子だった彼は全く新しい“フランス語”という技術を身に付けて夢を追い、大きな変革のうねりの中で、その語学を武器にして、文学を友として、上手に時代に身をゆだねて生きていったのだなと感じました。

最後に話された「帰国後はずっと和服でとおしたんですよ」というエピソードはとても印象的で、明治時代の頭官で何人かそうした人物がいたのを思い出し、彼もまた近代に生きた日本人らしい日本人だったのだとおもいました。（速水）

お祖父様の川島忠之助さんが残した膨大な数の写真、手紙などから、明治という激動の時代を独自の視点で読み解いていただき、あっという間の2時間でした。横須賀製鉄所技術者見習いからフランス語通訳へ転身のいきさつや、富岡製糸場でのお雇い外国人の素顔、時代を動かした人々との交流など、大変興味深く伺いました。頂いた資料の中で一番印象に残るのは、かねてより尊敬している料理研究家の辰巳芳子さんの祖父、辰巳一さんの少年時代の写真です。横須賀製鉄所「餐舎」一期生で忠之助さんとは同期、ということでした。手元に1920年代、3歳の芳子さんとお祖父様のご一緒の写真があります。

「祖父と過ごす時間は静かでこの上もない平和に満たされていた」（ミセス2006年12月号）。様々な人生が交錯し、響き合い、次の世代に「良きもの」を遺していくのだ、ということであらためて感じています。（堀口）